



**Data**

監督・脚本: アナ・ルイーザ・アゼ  
ヴェード

出演: ホルヘ・ボラーニ/ガブリエ  
ラ・ポエステル/ジュリオ・  
アンドラーヂ/ホルヘ・デリ  
ア/アウレア・バプティスタ  
/マルコス・コントレーラス  
/グロリア・デマシ

## 👁️👁️ みどころ

ブラジル発の、地味でぶあいそう(?)な映画が、いい味を!視力を失いつつある78歳の独居老人は、サンパウロに住む息子からの同居の申し出を拒否。そんな男にある日届いた女性からの1通の手紙が大波紋を!

手紙を代読したのは23歳の自由奔放なブラジル娘。彼女の意外な感性と文才がストーリーの面白さを形成していくが、2人の急速な進展はかなりヤバイ・・・?手紙の代筆だけならまだいいが、同居の是非は・・・?

そんなゲスの勤練りは無用!46年前に“三角関係”にあった女性との文通の開始は、いかに心ときめくものになっていくの?

もっとも、総決算は想定範囲内!そう思っていたが、いやはや、本作の結末にはビックリ!こりゃ、大拍手!

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

### ■□■地味でぶあいそう(?)なブラジル映画がいい味を!■□■

本作の日本への配給はムヴィオラ。パンフレットの末尾にはその代表である武井みゆき氏の「いつかやりたかったブラジル映画。探しつけて、出会いは偶然。」と題した<配給に寄せて>がある。それを読むと、彼女のブラジル映画への愛着がひしひしと伝わってくる。

ブラジルは、アルゼンチンやチリと並ぶ南アメリカの大国。チリは、1970年のアジェンデ大統領の当選による人民連合政府(社会主義政権)の誕生によって一躍世界的な注目を浴びた。映画でも、『チリの闘い』第一部(75年)、第二部(76-77年)、第三部(78-79年)(『シネマ39』54頁)はすごい映画だったが、ブラジル映画が日本に紹介されることは少ない。有名なのは、せいぜい『シティ・オブ・ゴッド』(02年)や『シティ・オブ・メン』(07年)(『シネマ21』254頁)程度だ。

さらに、大国ブラジルと大国アルゼンチンとの間に挟まれた、南アメリカで2番目に面積の小さい国がウルグアイ。本作の主人公である、78歳の独居老人で、今は目がほとんど見えなくなっているエルネスト（ホルヘ・ボラーニ）の出身地がそのウルグアイだ。彼が今住んでいるのは、ブラジル最南部の州リオグランデ・ド・スルの州都ポルトアレグレだが、残念ながら私を含むほとんどの日本人はそう聞いてもチンプンカンプンのはずだ。したがって、本作をしっかりと味わうためには、パンフレットにあるさまざまなキーワードの勉強が不可欠だが、「手紙の代読と代筆」をストーリーの核に据えた本作は、地味で面白い（？）ながら、エルネストの知識と教養、そして善良な人柄が存分に発揮され、何ともいい味を出している。こりゃ掘り出し物！こんないい作品を発掘し、日本への配給を実現してくれたムヴィオラ代表の武井みゆき氏に感謝！

### ■□■手紙の送り主は？内容は？■□■

ある日、ある女性から一通の手紙が届くところから物語がスタート。そんな映画はたくさんある。韓国作品『天国からの手紙』（05年）は、火星に旅立った父親から届く手紙がストーリーの軸だった（『シネマ8』81頁）が、本作はエルネストが46年前に捨てた故国ウルグアイに住む友人オラシオの妻ルシア（グロリア・デマシ）から、オラシオの死亡を知らせる手紙が届くところから物語がスタートする。もともと、ぼんやりと人の動きが見えるだけで、文字を読むのは無理なエルネストがそれを知ったのは、隣に住む親友のハビエル（ホルヘ・デリア）に手紙を少し代読してもらったためだ。しかし、いくら気心知れた隣人でも、かつての親友の死亡を知らせる手紙を読んで、「これでルシアは独身だ。チャンスが来たな」と冷やかしたのは、いくらなんでもやり過ぎ・・・？

頭にきたエルネストは、手紙を最後まで読んでいないのにハビエルをたたき出してしまったが、手紙の続きが気になって仕方ないのは当然。そこで、週に一度部屋の掃除にやってくる掃除婦のクリスティナ（アウレア・バプティスタ）に手紙を読んでくれと頼んだが、彼女にはスペイン語の手紙を読むのは無理だったらしい。そこで、今度は32号室のベラ夫人の姪で、入院した叔母に犬の散歩を頼まれたという若い女性ピア（ガブリエラ・ポエステル）に読んでもらおうと、これが意外に大当たり。エルネストの書齋にあったウルグアイの作家ベネデッティの『休戦』を上手に声を出して読めるほど、彼女はスペイン語を読むのが得意らしい。また、23歳の若い娘で格別教養があるわけでもないのに、文章から相手の心を巧みに読み取ることができるようだ。

そのため、最後の「お返事下さい 愛を込めて」の文章をどう読み解くかについて、ひとくさりピア流の解釈を……。なるほど、これなら手紙の返信にも、ピアはうまく使えるかも……。

### ■□■“拝啓”はダメ！絶対“親愛なるルシア”から！■□■

当初ピアの年齢は不詳だったが、エルネストとの親しい会話が展開していく中盤になると、23歳であることがわかるし、グスタボ（マルコス・コントレーラス）という出来の

悪い暴力的な元カレと今なお付き合っていることもわかる。また、導入部では少しわかりにくいのが、クリスティナを交えての鍵のやり取りや、お金のやり取りに関する会話中、クリスティナが心配する通り、ピアにはひょっとして盗難癖も・・・？

本作冒頭には、ブラジルのサンパウロで暮らしている息子のラミロ（ジュリオ・アンドラーヂ）からの、サンパウロでの同居の申し出をエルネストが断るシークエンスが登場する。目が見えなくなっている、本がいっぱい詰まった自分の書斎にこだわり、何とか一人で生活していけると突っぱねる78歳のエルネストの姿に私は胸が痛んだが、これはこれでやむなし。クリスティナがそれなりの注意を払うとともに、目が見えなくなっているエルネストと、耳が聞こえなくなっている隣人のハビエルが、毎日ボケと突っ込みの会話を交わしていく限りは、きっと大丈夫……。本作には全般的にそんな雰囲気が充満しているから、エルネストがいくら独居老人であっても、ある程度は安心できる。

そして今、ロシアからの手紙を読み、その返信を書くにあたって、隣人のハビエルもクリスティナも当てにならないことになれば、頼れるのはピアだけだ。そのピアが、意外にもスペイン語を読むのが得意だったうえ、文章に対する感性もそれなりのものだったから嬉しい。息子の意見には従わない頑固者のエルネストがまずピアの意見に従ったのは、返信をタイプ打ちするのではなく、ピアに代筆してもらうこと。女文字だとわかるとまずい・・・？そんな懸念もあったが、その論点は如何にクリア・・・？

続いて、ピアの感性や文才が如実に表れる（？）のは、「拝啓」から始まった口述にピアが断固反対したこと。これは、ロシアの手紙の最後の文章が「お返事下さい 愛を込めて」とされていたことに対するピアの感性で、それに従うと、返信の冒頭は当然「親愛なるロシア」になるらしい。そこから始まる美しい後述の文章はさすが読書家のエルネストと感心できるものだったから、それを読んだピアも思わず「美しい」とつぶやく見事な出来だ。なるほど、なるほど。

## ■□■ “同居” の是非は？その反響は？ ■□■

本作冒頭、男の子のような髪短いボーイッシュなスタイルで登場するピアは、異様に（？）目の大きい得体のしれない女性で、日本人にはまずいないタイプ。エルネストと違って（？）恋愛体験も少ないようで、「元カレ」だという太っちょの男グスタボとの間もうまくいっていないことは明らかだ。彼女は当初はベラ夫人の姪だと自己紹介していたが、それは半分ウソだったことがわかるし、エルネストの部屋に自由に入出入りする中で小銭を盗んでいたこともわかるから、78歳のエルネストがこんな若い女をあまり信用するとヤバイ。それは誰でもわかるから、ストーリーが展開する中、エルネストが空いているラミロの部屋にピアをタダで住まわせるという話が進んでいくと、掃除婦のクリスティナはもとより、隣人のハビエルもそれを心配したのは当然だ。

そこに色気が絡んでいないことはハッキリしているから、本作は“その手の映画”にはなっていないが、そうかといって、ピアを息子の部屋に住まわせるのは如何なもの・・・？

## ■□■文通が開始？46年前の三角関係は？■□■

中高時代を松山で過ごした私は、中学2年生の時から、親の転勤に伴って大阪に移住した小学校時代からの友人との文通を開始した。その内容は日常的な様子を交換する他愛のないものだったが、46年ぶりに受け取ったオラシオの死亡を知らせるロシアからの手紙に対して、「親愛なるロシア」と返信したことによって、どんな反響が・・・？

果たして、心待ちにしていた(?)ロシアからの返信には、「嬉しかったわ 『親愛なる』で始まる手紙 『拝啓』で始まる手紙には距離を感じてたの」と書かれていたから、エルネストはもちろん、ピアも大喜びだ。そして、ロシアからの返事を読んだのは、昼間ではなく真夜中。しかもエルネストのベッドの中だったから、ひょっとして・・・?いやいや、いくらなんでもそれはあり得ないが、そこでピアに語られるエルネストの告白(?)は興味深い。ロシアはオラシオと結婚しサンパウロに住み、そのオラシオが最近死亡したわけだが、46年前の3人の関係はひょっとして三角関係?エルネストにとってロシアは単なるガールフレンド?それともひょっとして2人はベッドインしたことがあるの・・・?そんなピアからの質問(厳しい追及?)の前に、エルネストはポツリポツリと真相を・・・?これはおよそ78歳の独居老人と23歳の若い娘が瞳を輝かせながら夜を徹して語り合うテーマではないが、本作中盤ではそれがいかにも自然な、そして白熱した議論(?)になるので注目!

そんな脚本を書き、そこまでの演出をしたアナ・ルーザ・アゼヴェード監督に拍手!

## ■□■ハビエルの選択は?ロシアの選択は?■□■

人生は選択の連続。本作を観ていると、そのことがよくわかる。それはエルネストのみならず、隣人のハビエルも同じだ。チェスをしながら、健康診断のPSA値やクレアチニン値を自慢している時は2人も気楽だったが、ある日ハビエルの妻エルビラが突然亡くなってしまうと、ハビエルは結局ブエノスアイレスに住む息子の元に帰る選択をすることに。「ブエノスアイレスには戻りたくないと言っていたのに」。そう引き留めるエルネストに対するハビエルの答えは、「独りで死ぬのは嫌だ。“老いては子と同居”さ」だった。なるほど、それも一つの選択だ。

しかして、空いている息子の部屋にピアを同居させたのがエルネストの選択なら、それを受け入れたのはピアの選択。しかし、それがピアの元カレを怒らせ、無用なトラブルの原因になったことは間違いない。さらに、学会のついでにわざわざ家に寄ってくれた息子も、自分の部屋にピアが泊まっていたのを知ってビックリ。こんなトラブルが続けば、いくら自由奔放なピアでも「エルネストとの同居はさすがにまずい。私が出ていかなければ」と決心したのはある意味当然だ。さあ、本作の結末は如何に・・・?

## ■□■結末にビックリ!独居老人の選択は?手紙の宛先は?■□■

本作のここまでの展開は、意外なストーリーやドラマティックな筋書きを含んでいるものの、すべて想定内の範囲内のもの。そして、奥さんの死亡を契機として、隣人のハビエル

がブエノスアイレスに住む息子の元に戻るのなら、エルネストもピアが出ていくことを契機として同居を希望してくれているサンパウロの息子の元へ……。ほとんどの常識的な日本人なら、そんな結末を予想したはずだ。そして、本作ラストには、荷物をまとめ部屋を片付けているエルネストの姿が登場するから、まさに予想通りの展開に……？

そう思っていると、そこで登場するエルネストのピアに対する質問は、「最後の手紙を書く時間はあるかい？」というものだったから、アレレ……。エルネストは、一体何のために、誰に、最後の手紙を書くの？そして、その手紙の冒頭は？それは、パンフレットのストーリー紹介でも「以下はご鑑賞後にお読みください」と書かれているので、ここでのネタバレは厳禁だ。あなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

私はこの意外な結末にビックリ！さあ、エルネストの最後の選択は何だったの？そして、本作ラストの舞台は一体どこに？

2020（令和2）年8月13日記